

棚田に吹く風

2025
冬
Winter
季刊



2 特集

石部棚田お米づくりプロジェクトの13年

5 フォトエッセイ

棚田の愉しみ

6 棚田・里山からのたより
都市住民と共に創る
「枯木又エコ・ミュージアム」
～棚田は農家の芸術祭～
新潟県十日町市枯木又地区

8 白米千枚田からの報告

10 棚田の逸品

生きもの屋の里山考

11 エコプロ2024レポート

12 読者のひろば

14 棚田俳壇

スタッフのつぶやき

15 Project Report

特集

石部棚田お米づくりプロジェクトの13年

石部棚田プロジェクト担当 高桑智雄・久野大輔

2012年から始まった静岡県松崎町石部棚田での当団体のお米づくりプロジェクトが、2024年をもって終了しました。今号の特集は、当団体の現地活動として13年の歴史とその意義を振り返ります。



1：初代保存会会長 高橋周蔵さん／2：2代目会長 高橋靖さん／3・4：復田の様子（2012）
5：棚田ネットワークエリアの棚田全景

保存会との共同プロジェクトがスタート

私たちと石部棚田の本格的な関わりの始まりは、2008年に石部棚田オーナーになった久野大輔（現・棚田ネットワーク理事）が当団体に入会し、数名の会員を引き連れてオーナー参加したことに遡ります。それから全国棚田調査プロジェクトでの調査活動や企業のCSR活動の斡旋、2010年に松崎町で開催された「第16回全国棚田（千枚田）サミット」への協力と、それに伴う石部棚田ホームページのリニューアル作業を担当したことで、保存会や町役場だけでなく集落の方々とも友好的な関係を築いてきました。

そして、当時の保存会初代会長で、石部棚田の復田活動の中心人物でもあった高橋周蔵さんから私たちにある提案がされたのが2012年でした。当団体のメンバーだけで石部棚田の入り口にある花壇として利用されていた8枚3坪の棚田を復田して、石部伝統の「蓑口と本畦」のある風景を再現して欲しいというものでした。棚田に上ってくる多くの人たちがまず目にする田んぼが、昔ながらの石部の風景であって欲しいという周蔵さんの強い思いからでした。

それは、田起こし、畦切り、畦叩き、代掻き、畦付け、畦塗り、田植え、草刈り、草取り、稲刈り、脱穀、精米の全作業を私たちが行い、毎日の水の管理、苗の準備、田植え直前の代踏み作業のみ保存会が行うという当団体と保存会の共同プロジェクトでした。

年間を通じての田んぼの作業の経験もなく、しかも都心から車で3時間半をかけてくる私たちにはたして出来るのかという心配もありましたが、まずは一年やってみようと2012年3月3日に、当団体メンバーと保存会総出での復田作業を行いました。



6：藁口づくり、高橋周蔵さんに教わる／7：藁口に水が流れる／8・9：畦塗り（本畦）／10：田植え風景／11・12：草刈り風景

オーナー田との違い・藁口と本畦がある田んぼ

石部棚田のオーナー制度は、会費三万五千元で約100㎡の田んぼで田植えと稲刈りの体験ができて、20kgのお米をもらうことができます。その田んぼの田植え・稲刈り以外の作業は基本的に保存会やボランティアによって行われています。

一方、私たちが管理する田んぼは8枚3㍓で年間費五万円（※）。水の管理、苗の準備、田植え直前の代踏み作業以外のすべての作業は私たちで行い、この田んぼで収穫されたすべてのお米をもらうことができます。平均100kg程度の収穫ができるので、かなり破格の条件ではありますが、当団体としてもそれ以上の予算を捻出するのが難しく、その分私たちが得意とする情報発信の分野で石部棚田の保全に積極的に寄与するという形でスタートしました。

そしてオーナー田とは大きく違うのが、水の落とし口と畦です。石部棚田では昔から、田んぼから田んぼに水を落とす場所に藁束を組んで作る「藁口」と呼ばれる伝統的な仕組みがありました。現在オーナー田では、手間と修復が必要な藁口をすべてやめてパイプで代用しています。しかし、藁口は労力がかかりますが、クッションとして水を受け止め、毛細血管のようにソフトに水を流し落とすので、棚田底部の粘土層である「盤」を傷つけないための先人の知恵でした。また、藁口は最後には自然に朽ちて田んぼの肥料になるという日本人の自然に対する循環思想の象徴でもあります。

また、石部棚田の伝統的な畦は、三面に付ける本畦（飾り畦）とも呼ばれるものでした。それはできるだけ苗を植える面積をとるため、畦を極力細く二面付けにして、最後にその畦を歩けるように平らにするための三面目を付ける技法です。こちらもオーナー田では、体験者の安全を考えて畦を幅広くとっているのと、手間を考えてすべて二面付けの略式畦となっています。

これらの伝統的技法を一年目は、地元のおばあちゃんや保存会の方々に教わりながら、見様見真似で米づくりを行い125kg程のお米が収穫できました。二年目からは、それらの伝統的技法や年間を通した作業が体験できる「昔ながらのお米づくり体験」と銘打ったイベントとして開催しました。

※初年度は50,000円であったが、以降30,000～45,000円の間で年によって変動した。



13：稲刈り風景／14：新米を食べる会（棚田交流棟にて）／15・16：毎回作業の終わりにみんなで集合写真を撮りました／17：藁はちつづくり、地元のお母さんが丁寧に教えてくれました／18：2024年秋、全て終わった棚田で、プロジェクトメンバー2人（久野・高桑）で記念撮影

コロナ禍を乗り越えて

イベントに参加してくれたのは一般申し込みの他、スタッフの家族や友人、会社の研修などさまざまで、やはり田植え・稲刈り作業は人気があり、平均30人程度の参加者で賑わう一方、草刈り・草取り作業は2、3名で行うこともありました。また収穫後の11月には棚田の交流棟を借り切って、その年の新米と石部伝統の呉汁を作って味わう「新米を食べる会」も開催し、地元との交流を深めた結果、オーナーとなって保全に参加する人が出るなど石部棚田の入口としての役割も果たせるようになりました。

転機は2019年の暮れから始まったコロナ禍。2020年は田起こし、畦切りまで行った段階で田植えを断念し、その年のイベントはすべて中止し、スタッフだけで草刈りを行いました。2021年はお米づくりを再開しましたが、全ての作業をイベントとして一般募集する形が難しく、田植え、稲刈りのみを体験イベントとし、その他の作業はボランティアによる少数運営へと切り替えました。

保存会の人手不足

2012年から13年12回のお米づくりを継続しましたが、保存会初代会長高橋周蔵さん、二代目会長高橋靖さんが亡くなり、年々保存会の後継者不足や資金不足が叫ばれるようになりました。藁口など伝統的なつくりのために、特に毎日の水回りや調整に時間がかかる私たちの田んぼが、現在の保存会に大きな負担をかけていることが表面化しました。またそれを補うオーナー相当の管理費に引き上げる余裕が当団体にもないため、保存会との話し合いの結果、2024年をもって、当団体でのお米づくりプロジェクトを終了することになりました。

参加者のみなさま、そして保存会ははじめ、松崎町、静岡県などの関係者のみなさま、私たちの10年以上の活動を支えていただきありがとうございました。当団体としては、今後はオーナー制度などの作業や、棚田協議会などへの協力を中心に引き続き石部棚田のサポート活動を継続していきますので、よろしく願います。



フォトエッセイ

棚田の

愉しみ

写真・文
玉井 質

晩秋の棚田は、時として写真のような素晴らしい夕焼けを見せてくれ、棚田に生きる者の心を癒してくれます。

年末には、もちつき大会や楽しい収穫祭で大いに盛り上がります。お米づくりの一年のすべての作業が終わり、新しい年を迎える準備に取り掛かります。

冬の棚田は、金剛山系の山々から吹き下ろす風が冷たく、静かに眠っているように見えます。時には雪が降ることもありませんが、風に吹き飛ばされてめったに積もることはありません。それでも何年かに一度くらいは、真っ白に積もることがあります。それも一夜にして半分くらいは融けて、黒い土と白い雪との段々模様を見せてくれます。

自然界の珍しい贈り物として、この地方の棚田を飾る雪景色は、とても素晴らしいです。

玉井 質 たまい ただし



1941 香川県生まれ
日本リアリズム写真集団所属・大阪府在住

■個展

- 2005 「私の大阪城」ギャラリー福寿草
- 2006 「私の大阪城」メディアラボNEXT豊中店
- 2007 「悠久の大地—雲南」メディアラボNEXT豊中店
- 2007 「悠久の大地—雲南」ギャラリー福寿草
- 2010 JRP連続展「悠久の大地—雲南」喫茶トリービビット
- 2011 JRP連続展「悠久の大地—雲南II」喫茶トリービビット
- 2015 JRP連続展「私の大阪城」茶白山画廊
- 2023 「慰霊の時 ヒロシマ」アート・スペース・わ

■写真集

- 『私景 大阪城マングラ』 2018 (株)日本機関紙出版センター
- 『棚田の愉しみ』 2021 うめだ印刷(株)
- 『東チベット高原に行く』 2022 うめだ印刷(株)
- 『慰霊の時 ヒロシマ』 2023 うめだ印刷(株)



棚田・里山
からの
たより



都市住民と共に創る「枯木又エコ・ミュージアム」

棚田は農家の芸術祭

新潟県十日町市枯木又地区



1: との畑田 / 2: 棚サバ集合 / 3: 棚田の草刈り / 4: 枯木又案内看板の設置

芸術祭と豪雪の集落

「大地の芸術祭」で、すっかり有名になった新潟県十日町市。枯木又地区は十日町市の中心部から約20km山の中に入った南魚沼市との郡境にあります。昭和56年の「56豪雪」では6・1mの積雪を記録した豪雪地帯で、現在10戸、25名で暮らしています。初めて来る人は「この先に集落はないだろう!」と道を間違ったと思って引き返すことがあります。しかし、ありがたいことに夏は南魚沼に通じる県道があり、下りれば関越高速道路まで15分、新幹線の浦佐駅まで25分という恵まれた環境にあります。新幹線で1時間、高速で早い人は3時間で花の都「東京」に行けます。(冬季は閉鎖)

集落の耕作を支える人々

雪解け水と雨に頼った田んぼづくりですが、約20ヘクタールほどの田んぼを通いの耕作者と地元の人8人で担っています。ご多分に漏れず過疎・高齢化で60代70代が中心ですが、男性は20代2人、30代2人、50代1人が住んでいます。しかし、皆それぞれに仕事があったり、お米づくりをしている人は限界のところまで来ていて今後どうしたらいいか?話し合いが始まるそうです。

都市と農村の交流の場

そんな中でも枯木又の自慢は3年前から「枯木又エコ・ミュージアムの会」を作って都会や町場の人たちと交流してきているところです。会員は北海道・東日本を中心に、100人ほど。今年は7月に福岡県の宇根豊さんを講師に迎えて「30周年記念講演会」を開催し、遠く新潟市のほうから会員以外の人も参加してくれました。

「枯木又エコ・ミュージアムの会」では枯木又の動植物や自然環境、伝統文化、そしてそこに住む人たちの

生活までも守っていく対象だという考えのもと、地元で昔からやられてきた盆踊りや冬のどんと焼きなどの伝統行事をはじめ農道や県道の草刈り、キャンプ場の整備など、また昔から「そば打ち」がやられていたこともあり毎年春に「手打ちそばの会」、秋に「新そばの会」が開かれています。そして、伝統文化では棚田を使った「ほたる祭り」と称して蛍の鑑賞とその様子を俳句会で披露、その後に懇親会をやっています。俳句作りも昔から盛んだったようです。

芸術祭に向けた取り組みと移住者

特にそば打ちは30年ほど前から栽培されている古代米の「黒米」をそばに練りこんだ「黒米そば」という珍しいそばも作ります。十日町では2000年から「大地の芸術祭」が3年おきに開催されていて、枯木又も2009年から作品の展示が始まりました。それに合わせて「地元も何かの形で参加したい」ということで、夏休み期間中の土曜・日曜

だけのお店でしたが、地元の野菜や野草を使った天ぷらそばの「黒米そば店」を開店して好評でした。最近では芸術祭のない年も毎年夏休みに開店しています。

幸い今まで活動してきた来たおかげか、4年前に隣の南魚沼市から女性が一人枯木又の自然に感動して移り住んでくれ、3年前に東京出身の30代のカップルが「もっと人のいないところに行きたい」と移住してくれました。先輩の女性は今年家を増築してお母さんも来てくれてにぎやかになって来ました。しかしお互いに慣れないことも多く、まだまだこれからということです。

つなぐ棚田遺産を旗印にした取り組み

枯木又も「つなぐ棚田遺産」に認定されていますが、十日町市は全国271ヶ所のうち1市町村としては全国一の14ヶ所あるということで「十日町市つなぐ棚田遺産連絡協議会」（仮）を立ち上げようということになりました。協議会では「棚田米」と銘打ったお米の販

売や棚田の作業ボランティアの募集などを計画しています。また、「棚田マップ」を制作して、「大地の芸術祭」と連携して、14ヶ所の棚田遺産を見て回れるようなことも考えています。棚田は一つの芸術だと思っています。今後はそういう活動とも協働しながら、今までの経験を活かして楽しくやっていきたいと思っています。

（枯木又エコ・ミュージアムの会事務局 長山田栄）



古代米黒米の田んぼ

■ 棚田へのアクセス

【公共交通】 JR上越線・六日町駅前からタクシー 利用で約20分

【自動車】 関越自動車道・六日町ICから 県道214号経由で約8km（大雨・冬季の閉鎖に注意）

■ お問い合わせ

枯木又エコ・ミュージアムの会
Tel. 025-579-2317

新潟県 十日町市



5：蕎麦打ち／6：黒米そば／7：自然田／8：鳥追い

白米千枚田からの報告（地震と豪雨を超えて

文・写真 白米千枚田愛耕会

石川県輪島市の白米千枚田は、2024年1月1日に震度7の地震で、また同年9月21～23日には線状降水帯による豪雨で甚大な被害を受けました。

地震の被害

全体の約8割の田で亀裂が入りました。ひび割れは深いところでは1mほど。道路・圃路や水路にも被害がありました。海岸際の歩道は崩れ、上からの土砂で埋もれ、海沿いから3～4枚目までの棚田は原形をとどめないほどに押しつぶされました。

亀裂や崩落などの「目に見える被害」と、後になって判明する「目に見えない被害」が存在することが分かりました。田植えが終わる頃を見計らって、作付しない田（亀裂修復済み）も水を入れ被害状況を確認。地震の揺れで一枚の田に高低差ができてしまい水が均等に行き渡らない、前日たっぷり張った水が翌日になると抜けている、膝上まで沈み込むような深い田んぼが発生、などが判明しています。

クラウドファンディング

白米千枚田愛耕会の会員の多くは自宅が全壊・半壊。しかし、棚田を思う気持ちから「能登半島地震―白米千枚田を修復し、再び米作りを。」というクラウドファンディングを実施。目標金額1千万円に対して、支援総額1855万円、支援者1092人の賛同がありました。たくさん寄せられた応援コメント

も会員の励みになりました。

有識者との連携、ボランティアの支援

千枚田の震災復興という課題において、有識者と出会い知見を広めることが出来たのは大きな前進でした。過去に震災に遭った棚田地域（阪神淡路大震災、中越地震、長野県北部地震）でも同様の「目に見えない被害」が確認されており、各地の対応も大いに参考になりました。

また、全国から多くのボランティアが訪れて、草刈りや修復作業などに力を貸してくれました。車を5時間走らせ、車中泊を続けて手伝ってくれる方もいました。

2024年度の稲作

愛耕会は、春先から米づくりの準備と棚田の修復を同時並行で行ってきました。用水路の早期復旧や、比較的被害の少なかった水田を選び、約120枚の水田で田植えを実施し、9月3～8日には稲刈り。全国から延べ100人ほどが訪れ、収穫の喜びを分かち合いました。

《豪雨災害（2024年9月21～23日）》

線状降水帯による豪雨が能登を襲い、春から少しずつ復旧してきた千枚田が再び被災。今年作付けた田んぼは全て刈り取りが終わっており稲への被害はなく、それだけが救いでした。



1～3：地震によるひび割れ。鉋に刺してあるのはイベント用の小道員／4：地滑りで押しつぶされた田
5・6：駆け付けてくれたボランティア／7：災害復旧事業のための被害調査

修復半ばだった地震の亀裂がさらなる被害を誘発し至る箇所で大規模な地滑りが発生。山の崩落や土砂流入、そして復旧後の千枚田に水を引き込むための谷山用水がこの大雨で再び損壊。農業用水の被害は地震の時よりはるかに甚大です。頭首工までの道は土砂や倒木で塞がり頭首工のあった場所も全て流され原メートルメートル近く水位が上がり、橋も激流に流されました。用水の通り道であるU字溝も損壊。

周辺地域も大きな被害を受けました。流された家、土砂が入った田畑、泥まみれの道路……地震から立ち直ろうとしていた矢先の豪雨。会う人会う人から「心が折れた」との言葉が聞かれました。愛耕会メンバーも、家に土砂が大量に入ったり自宅への道が寸断されたりと今も大変な状況です。

道の駅千枚田ポケットパーク

千枚田に隣接する道の駅「千枚田ポケットパーク」は愛耕会の作業休憩所として使用していましたが、建物裏が崩れてしまい再開の目処は立っていません。隣接の駐車場も、地震の際の亀裂で50cmほどの段差が出来ていた箇所が崩落しました。

復興に向けて

1月1日の地震以後、行政や地元業者等々と共に復興に向けて歩んできた私たちですが、9月の豪雨災害で千枚田はさらに大きなダメージを受けました。振り出しに戻るところか、5歩も6歩も後ろに下がったような感覚

です。地震、そして大雨、「復旧」「復興」という未知の経験の中で、判断が難しい局面を迎えることも多く、葛藤も絶えませんでした。2025年の作付けは厳しいと思われるかもしれませんが、現在は春に何とか作付けできるよう、建設業者による用水の仮復旧工事が急ピッチで進められています。崩れた棚田は再び国の災害復旧事業を受けるために査定が入っています。査定が落ち着くまでは修復作業に入れないため、今(2024年11月)はとにかく棚田全体の草刈り作業(管理)に努めています。

どんな場面においても「将来にどんな千枚田を残したいか」をずっと問われ続けてきた気がします。資金面で支えて下さった皆様、棚田と共に汗を流して下さった皆様、様々な知識や知恵をくださった皆様、たくさんの方の支援に感謝いたします。牛歩の歩みではありますが、故郷の宝を守るために少しずつ歩みを進めてまいります。

白米千枚田は、日本海に面した約4ヘクタールの傾斜地に1004枚の水田が広がる。日本の棚田百選、国の名勝、世界農業遺産の認定など、他に類を見ない貴重な存在である。

棚田全体は景勝保存協議会(事務局・輪島市観光課)が管理し、JAや地元山菜組合、個人農家などがそれぞれエリアごとに分かれて耕作している。2007年から始まった棚田オーナー制度(約550枚)は白米千枚田愛耕会が耕作管理を行っている。愛耕会は2006年から活動を開始。地元約60、70代を中心とした約30名の会員がいるが、常時作業に出てこれるのは12名程度。被災した今年は愛耕会がほぼ全ての棚田の維持管理に努めている。



8・9: 復旧作業。田植え準備もした / 10・11: 地滑り / 12: ポケットパーク駐車場の崩落 / 13: 土砂の流入 / 14-1・14-2: 谷山用水が大雨で再び損壊。豪雨前の頭首工(右写真)は豪雨で跡形もなく流され(左写真)、取水口の場所も分からなくなっている

特選 棚田の逸品

佐賀県伊万里市 川内野棚田
デンデン農園の黒米羊羹

黒米の「色素と食感」を生かした羊羹

デンデン農園 幸松伝司

川内野棚田は、村人の英断によって昭和60年に圃場整備に着手し、3年の歳月を経て石積み棚田から土坡の棚田に生まれ変わりました。機械化による省力化が進み若者の定住につながり、集落存続の大きな礎となりました。

標高300mの山々に囲まれた集落は、昼夜の適度な寒暖差が農作物の生産に適し、米の生産では過去に佐賀県食味コンテストにおいて金賞に輝くなど良質な米の生産地として知られています。

平成6年には、村おこしグループ「川内野COME倶楽部」を結成し、新たな特産品「黒米」の栽培を始め活動を展開してきました。

黒米は食米としてだけではなく、加工品の開発にも力を入れています。うどん・パスタや羊羹・煎餅の菓子類にもチャレンジし黒米をリーズナブルな商品には全てに「川内野」の文字を入れ発信することで、伊万里の新たな土産品としても注目を集めるようになりました。

特に羊羹は黒米の紫色（アントシアニン）を生かしたこだわりの逸品であり、「モチリしっとり」食感と甘さ控えめで健康にも優しいと好評です。棚田保全は難題山積ですが、前を向き一歩ずつ課題を克服し夢のある村づくりに頑張ります。



黒米ようかん

デンデン農園HP



生きものの屋の

里山考

文・写真（株）環境指標生物 川口 貴光

冬の水路になびくカワモヅク

モヅクという酢の物にして食べる海藻のことですが、真水に生えるカワモヅクという藻類をご存じでしょうか？

カワモヅクは湧き水の豊富な河川や水路などに生育する紅藻類で、日本では二

十種あまりが知られています。褐藻類である海のモヅクとは分類が異なり、ほぼ食用にもされない藻類なのですが、開発などにより湧水環境が失われつつあることから、ほとんどの種が環境省のレッドリストに掲載され、希少な存在となっています。

主に田んぼ周りの水路でみられるアオカワモヅクという種は、晩秋に藻体が出現し、冬から春にかけて数センチほどに成長します。そして晩春には次の世代となる目に見えない胞子体を残し、枯れてなくなります。藻体は日当たりのよい水路の石や木杭などに着生することから、草刈りや泥上げなどの維持管理が適切に行われた環境が必要となります。アオカワモヅクも、人の営みによって育まれている里山の生きものの立派な一員ですね。少し寒さを我慢して、冬の水路になびくカワモヅク、是非覗いてみてください。

ちなみに、現在ではモヅクではなくモズクの表記が一般的で、前述の環境省レッドリストでもカワモヅクと表記されています。これは、戦後普及した「現代仮名遣い」によるものですが、今回は本来の語源を尊重し、あえてモヅク（藻付く）と表記してみました。



緑色をした紅藻類のアオカワモヅク(ややこしい)

棚田へおいでよ!

今年で10回目となる、エコプロ展の「日本の棚田共同展示コーナー」。
お馴染みのクイズラリー、棚田酒めぐり、2年目になった「つなぐ棚田遺産オフィシャルサポーター」。そして、能登半島輪島市の白米千枚田からは、震災と豪雨という壮絶な被災状況がパネル展示で報告。募金も行われ、3万7千円余りが集まりました。



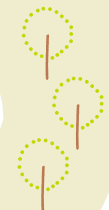
- 出展団体一覧**
- 棚田ネットワーク
 - 全国棚田(千枚田)連絡協議会
 - 色川棚田地域振興協議会(和歌山県那智勝浦町)
 - 棚田を守る会 (和歌山県那智勝浦町)
 - 和歌山県棚田等保全連絡協議会(和歌山県)
 - 佐渡棚田協議会 (新潟県佐渡市)
 - 稲倉の棚田 (長野県上田市)
 - しずおか棚田ネットワーク (静岡県)
 - 高島市の棚田 (滋賀県高島市)
 - かみかつ棚田未来づくり協議会(徳島県上勝町)
 - 東後畑の棚田 (山口県長門市)
 - 第30回全国棚田(千枚田)サミット (大分県別府市)
 - 実行委員会

エコプロ2024

日本の棚田共同展示コーナー

2024年12月4日(水)～6日(金)





「こんな活動をしています」「こんなことやります」という皆さんの声を編集部までお寄せください! ご要望、感想やご質問でもOK!
(声)800字まで、レポート400字まで。写真も添えて
〒160-0003 東京都新宿区西新宿7-1-16
トーションハイム新宿704号「棚田に吹く風 読者のひろば」宛
メールでも受付しています ♪ hensyu@canada.or.jp

「美しい棚田を守るために」 ～学生研究の視点から～

信州大学大学院総合理工学研究科
富田 樹 とみた たつき



私は、大学院で棚田の保全に関する研究をしています。棚田の「美しさ」と「課題の複雑さ」に興味を持ったのが、研究を始めたきっかけでした。もともとは茨城県出身で、棚田という存在を知りませんでした。そんな中、授業で姨捨棚田を見た際に、その壮大な景色に魅了されました。一方で、その美しい景色を守るためには耕作の継続が必要で、人の問題や生産性の問題など、超えなければならない課題が複雑に絡み合っていることを知りました。そして、この美しい景色をどう守っていくか考えたいと思い、棚田保全を研究のテーマにしました。

大学4年生のときには、姨捨棚田の実態を把握して土地利用変化の構造を明らかにしました。土地利用調査では、研究室のメンバー全員で1週間棚田を歩き回ったのが良い思い出です。調査の結果、水田はなんとか維持されているものの、それは保全団体の方々の努力によるところが大きく、保全団体の方々も高齢化していく中で、今後は耕作維持も厳しい実態が

見えてきました。

大学院に入ってから、棚田地域振興法に関する研究を行っています。2019年に施行され約5年が経過しているこの法律ですが、これに関する研究は無いので実態がよくわからない状況です。なので、どのように活用されていて、どのような課題があるのかを明らかにするために研究をしています。

研究で各地域に行く中で、棚田と一口に言ってもぜんぜん特徴が違うなということを感じます。地理的条件・人的条件・保全策のそれぞれの面で特徴は多様です。そんな中でも、なんとか耕作を維持するので精一杯で、既存のオーナー制度や6次産業化などの保全策が向いていないと考えられる棚田地域が数多くあります。将来的には、研究を通じてこういった地域を保全していくために、新しい時代の保全技術を開発してみたいです。



読者の Best Shot!

中野の棚田

山梨県南アルプス市 片山 京子

富士山と棚田、甲府盆地を見渡すことができる、ここだけの景色。緑の風吹く瞬間が、ふっと心を軽くしてくれる。ここでの暮らしにもずいぶん馴染んできました。神奈川県川崎市から、家族で移住し、農業を始め、7年がたちました。都心から来た友人たちの心も何度も軽くしてくれました。そして、子供たちの遊び場にも。山の一番水を入水した田んぼには多種多様な生物が暮らします。珍しい虫を見つけて得意げな子、初夏には蛍を追う子供たちにも出会えます。未来へつないでいきたい、豊かな暮らしがあります。



「棚田サミット」に参加して

早稲田大学大学院 中野 太雄

10月17日・18日に全国棚田サミットが、長野県上田市で開催されました。開催にあたり、ご尽力いただいた関係者の皆さま、誠にありがとうございました。

一日目の午前は、4会場に分かれての分科会が開かれ、それぞれに熱気ある議論が交わされたと聞き及んでいます。午後は、開催セレモニーと基調講演を経て、稲倉の棚田の近くに住む小学生から素敵な歌の披露と地域おこし協力隊による実践報告があり、最後に、災害の続く能登の白米千枚田からの報告もありました。

二日目は、四つのコースが用意された現地見学会が開催されました。棚田をキャンプ場にするという新しい試みには、限られたリソースから特別な体験をしてもらうための知恵と工夫が詰め込まれていました。実は、自分は棚田に直接かわったことはなく、今回は大学院で土木分野の景観を学ぶ学生として、参加させていただきました。おそらく参加者の中で最も棚田から遠い存在（そして一番の若手？）だったのではないかと思います。

しかし、一日目の夜にあつた交流会では、全国津々浦々から集う農家の方々のアットホームな雰囲気迎えられ、楽しい時間を過ごすことができました。自分にとって棚田とは、これまで眺める対象でしかなかったのが、このサミットを通じて、目の前の棚田の風景のその先に「カカワル」人の技術や蓄積されてきた歴史を重ねて眺めることができるようになりました。日々、棚田と向かい合い、棚田と共に暮らす人々の営みあつてこそその風景であることを再確認させられました。また来年度も同窓会のように集えることを楽しみにすると同時に、自分のような新たな「カカワリ」しろが広がることを切に願っております。



稲倉の棚田



現地見学会の様子



サミット会場



写真中央が筆者、サミット会場にて

編集部イチオシ! BOOK & MOVIE



棚田の村の少女



川島英子 著
1,500円＋税
吉備人出版社
2023年7月

ジャケ買い（レコードをジャケットの意匠で買うこと）という言葉があるが、この本はそれだった。突然母を亡くした小学4年の少女・かおりは、棚田が広がる田舎にある祖母の家に預けられ暮らすことになった。凛とした祖母は、亡き母の面影とともに暮らしていることがわかってくる。そして少女自身も仲間とうちとけていく。やがて学校で友人ができた頃、亡き母の思いに沿って少女は都会に戻っていく。棚田は控えめに登場する。少女を見守り季節の移ろいを示しているようだ。自然の描写は勿論、祖母の家に向かうローカル線や無人駅、スクールバス通学、復活する神社の秋祭りで巫女舞いの奉納など、地域の今をあらわすエピソードも随所に出てくる。「棚田の村の少女」のほか「里山の仲間たち」「霧の向こうの森の家」の、自然の中で過ごす楽しさや不思議さを感じる物語三話を掲載。著者は岡山県美咲町在住の日本児童文学者協会会員。著書は児童文学のほか随筆・短歌に及び、受賞作品も多数。

第53回

棚田俳壇

本人しろうと五七五

令和7年

誌上添削

柿の苗植えて八年待つそんな
■ヒント
ことわざをいながら植える
【次回募集は2月末末日※解答は下記

豊作に子たち手刈す 学校田
山の田も水足りたのか 豊作に
ヒコバエ田通う鳥あり 年の暮れ
帰り鳥二十羽、三羽一羽あり

新潟市 田入絵人



暑き茶を入れて迎えん 今朝の秋
バス待ちて「天才」雲に癒される
新米のなかなか届かぬ 米余り
銀杏も 団栗拾わぬ 都会人
おむすびのなんとも旨し 菊見かな
青空に 柚子の実映えて 冬近し
山火事洪水 関税好きの ちの世界
「米」は去り「中」は入ってくる「DD

調布市 高木宏明



鴨来たる 池は朝から 大合唱
曜日さえ忘れて忙し 年暮れる
母の腕持ち上げセーター着せる 朝
良くなれと 願って七草粥作る

豊島区 小川順子



冬の庭 静けさ破る スズメ二羽
寒空に バルーン大会 りんご獲り
ひこばえも 棚田の賑わい 霜に耐え
ナベ物が 煮物か迷う 冬の夕

所沢市 上久保郁夫

いつの間に 高級魚なり 秋刀魚かな
棚田にて 工夫を語る 笑顔あり
五能線 三味でもてなす 車内かな
棚田米 今年はどこも 有難い

取手市 杉山行男

鹿被害 棚田守りの 嘆き聴く
飛鳥道 ススキはうけて 語り来ぬ
鷺一羽 琵琶湖一面 静まりぬ
コロコロと 枯葉舞い 敷く 散歩道

浜松市 一露

読者投稿：8年待つそんな柿の苗をいながら植える

棚田ネットスタッフの
つ・ぶ・や・き
〈輪番制〉

今回のつぶやき人
事務局 Kamy

「移住失敗!」・ネット上を駆け巡った衝撃的な出来事で、今でも
頭から離れません。

首都圏を離れ、希望に満ちた若い4人家族が選んだ移住先は、
愛媛県の地方都市で、市街地から車で1時間ほどの山奥の集落で
した。清流と豊かな自然、住宅もあてがわれ、暖かい隣人に囲ま
れて「地域おこし協力隊員」としての生活が始まりました。

やがて、休日の草刈り共同作業をめぐり、集落を取り仕切る長
老から睨まれる。この長老は、集落の活性化に若者の英知を活か
すどころか旧来のしきたりを押し付けたのが、事の発端のよう
です。溝は大きくなり、市役所担当者の仲介もむなしく若い家族は、
失意のなか集落を去ったという。

今では、20人規模の協力隊員を抱える市町村もあるなど、移住
者に大きな期待を寄せており、多くの棚田地域も協力隊員によっ
て支えられていると聞きます。

職場での疎外感や人間関係、都会の喧騒に耐えかねて新天地を
目指す移住者の多くは、多彩なアイデアを持っており、この移住
者の受け入れにひとたび成功した地域には、ルールが敷かれトラ
ブルも少ないようです。

今年の春、知り合いの女性も首都圏を脱出し、九州南部の地方
都市に協力隊員として移住しました。農業関係とは別の分野です
が、家は探してくる、研修や視察もさせてくる、爪を隠す必要
もなく、1年目から才能全開で活躍できる環境が整っていたようで、
生き生きとして地域情報の発信を続けています。

協力隊員の6割は、任期終了後も地域に残り、活性化の一翼を担っ
ているとのこと。頼もしい存在だと思っています。

岐阜県恵那市

棚田ビオトープ プロジェクト

稲刈りを終えて



七十二候の雷乃収声（かみなりすなわちこえをおさむ）頃、9月23日（月／秋分の日）10時から棚田ビオトープの稲刈りをしました。参加者は3名、小さな棚田ですが、雑草を抜いたり、はさ掛け（途中から近隣に住む小森さんが指導）を作ったりしていると、2時間弱かかってしまいました。天候に恵まれたので、気分良く、昼食に喫茶店で食べたドリア（お米を食べることが重要）が美味しかったです。

春の水溜りに卵を産むヤマアカガエルの卵塊を探す「第18回かえるの卵を探そう！」は2025年3月15日（土）に予備調査、20日（木／春分の日）に本調査と今年は2回開催します。今年度8月に予定していた「こどもビオトープ観察会」が中止となってしまったため、その分「かえるの卵を探そう！」は2回開催する予定です。参加するには、雨天による中止・延期もあることから、事前申し込みが必要です。開催1週間前までに氏名と携帯電話番号を棚田ネットワークにご連絡ください。追って私から連絡いたします。（相田 明）

静岡県松崎町

石部棚田で昔ながらの米づくり

稲刈りとお米の引き取り



10月5日・6日に稲刈りを行いました。1日目は雨もあがり、ベテランに若い学生たちも加わって、とても賑やかな稲刈りとなりました。足元が少し悪かったですが、慣れた手つきで刈り→束ね→干しと予定の作業をスムーズに終わることができました。2日目は快晴で2組のファミリーが来てくれました。今年は山に食べ物が少ないのか、鹿の侵入で稲に被害が見られました。

11月19日に天日干しが終わり脱穀された私たちの最後の収穫米を引き取りに行きました。籾にして99kgと2年前の最低収穫量に並び、更に精米すると67kgに激減し、多く収穫された年の約半分という衝撃の結果となりました。今年は松崎町全体でも鹿の影響は甚大だったそうです。自然の力に左右される棚田でのお米づくり。13年間本当に勉強になりました。石部棚田に感謝しながら最後の新米をいただきます。（高桑智雄、久野大輔）

千葉県鴨川市

川代だより（稲刈り編）

一年の納め「収穫祭」に参加



今年は、会としてのプロジェクトは休止としましたが、地元で棚田ネットワーク用に田んぼを用意していただき、田植えから草刈り、稲刈り、脱穀、収穫祭まで任意参加者によるお米づくりを楽しみました。稲刈りは雨上がりの暑さのなか6名が参加し、汗だくになりながらもなんとか終了できました。

10月6日の収穫祭は、棚田近くの集会所前で開かれ、演歌歌手による歌謡ショーに加え、大山千枚田の保存会による「大山音頭」の披露などがありました。また城西国際大学の学生もイベントを手伝うなど、例年になく賑やかな収穫祭となり、オーナーさんや農家の皆さんも笑顔あふれるひと時を過ごしました。

来年は、棚田ネットワークとして、多くの皆さまに棚田の魅力を感じていただけるよう地元農家の方にご協力いただきながら体験プログラムを開催したいと思います。（杉山行男・小川順子）

使いづらい、だけど美しい！ 始めてみよう『旧暦生活』

今年もできました！
旧暦 棚田 暦
ごよみ

月の満ち欠けでひと月を知り、太陽の動きで季節の移り変わりを感じていた「旧暦」での暮らし。
旧暦棚田ごよみは、四季折々の美しい棚田の風景とともに、暦で「季節感」を味わうことのできる旧暦カレンダーです。

壁掛けタイプ

A4(縦210×横297mm) ※開くとタテA3サイズ



旧暦がわかる
『ミニブック』
付いています！



四季折々の
棚田風景

二十四節気
七十二候
雑節を表示

注文サイト
QRコード



新暦表示
もあり！

月の
満ち欠け
イラスト
入り！

5部セットがお得！
贈答用にどうぞ！

¥1,300(税込)

5部セット

¥6,000(税込)

※送料は別途かかります。

ご購入は

TEL. 03-5386-4001 もしくは棚田ネットワークHPから

●お電話受付時間 13:00 ~ 16:00 ※土日祝をのぞく

※このカレンダーは、旧暦の元日(令和7年1月29日)から始まりです。

新暦表示は令和7年1月29日(水)から令和8年2月16日(月)までです。



わたしたちと『棚田の応援団』やりませんか！

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい!」という会員によって自主的に運営されているNPOです。
消えゆく美しい“棚田”をどのように保全していくことができるのでしょうか? 一緒に考えませんか? ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう!

会員に
なろう!

年会費

私たちは、会報誌「棚田に吹く風(年4回)」やホームページで豊富な棚田情報を発信しています。会員になりこれらの活動に参加してみませんか?

○個人会員

維持会員 1口1万円(1口以上)
一般会員 4,000円
応援会員 3,000円
学生会員 2,000円

法人会員を募集しています!

私たちは、棚田を守るため、農山村の人々と都市住民双方の協力のもとに様々なプログラムを企画・運営しています。これらの社会貢献活動に賛同し、ご支援いただける企業・団体・事業主様を募集しています。詳細はお問い合わせ下さい。

年会費

○法人会員(賛助会員)
1口3万円(1口以上)

編集部から

子供のころと違って、大人になると月日が経つのが早く感じられますよね。私たちにとって最も身近な「棚田地域振興法」も成立から、もう5年目を迎えました。この法律のもと「つなぐ棚田遺産」の認定やオフィシャルサポーター制度、あるいは当会の「棚田NAVER」の取り組みなど活動の輪が広がってきたと思います。
エニフロ2024に関連し「棚田地域振興法」をめぐるナイトセミナーが開かれ、その概要は、ホームページに載せておりますので皆さまも是非ご覧下さい。振興法の単なる期限延長ではなく、付加価値を加味した新法を目指すとお聞きし、頼もしく思っています。

ホームページの姿を見よう!

棚田ネットのWebサイトも
見てみてください!



<https://www.tanada.or.jp>

棚田に吹く風

2025年 冬号 Vol.134

発行



認定NPO法人

棚田ネットワーク

〒160-0023

東京都新宿区西新宿7-18-16トーションハイム新宿704号

Tel / Fax 03-5386-4001

e-mail: info@tanada.or.jp URL: www.tanada.or.jp

郵便振替口座: 00100-7-151565